

〔亜熱帯における農業技術の普及及び経営指導〕

野菜・果樹・花き・切葉類の生産性向上
～小笠原におけるカボチャ3品種の品種特性～

小野寺洋史・五十嵐清晃*

(営農研修所) *現八王子研修農場

【要約】カボチャの各品種における収量調査および果実特性調査において、全ての項目で有意差はみられなかった。現地に普及させるためには、重量や糖度を向上させるために収穫時期などを検討する必要がある。

【目的】

小笠原では1990年頃まで、日本カボチャが広く栽培され、主要農産物となっていた。近年、2月から5月の国産カボチャが高値で取引される傾向があり(図1)、沖縄などの温暖な地域で西洋カボチャが栽培されている。そこで、本試験ではオクラやシカクマメの後作となる時期を想定しカボチャ3品種の栽培を行い、今後の小笠原におけるカボチャ生産の可能性について検討する。

【方法】

沖縄で冬季に栽培される黒皮の大玉品種を参考とし、「くりほまれ(株サカタのタネ)」、「恋するマロン(カネコ種苗株)」、「ほっこり133(タキイ種苗株)」を供試品種とした。2021年11月15日に播種し、12月8日に各品種24株(8株3連制)を露地圃場へ、株間40cm、条間4mの条件で定植した。栽培は親蔓1本仕立てとし、12節目以降の雌花に人工受粉を行い、着果数は1株あたり1果とした。人工受粉は2022年1月4日から26日まで、収穫は2022年2月28日から3月22日まで行った。人工受粉25日後以降に果実下に生育用台座を設置し(図2)、人工受粉55日後に収穫を行った。収穫当日に果実重、果実高、果実幅、果実形状および果皮色を、収穫10日後に赤道部肉厚、花痕部肉厚および糖度を調査した。

【成果の概要】

1. 果形は、「くりほまれ」では扁平型および長球型、「恋するマロン」および「ほっこり133」では扁平型であった。果皮色は、全ての品種で黒緑色であった(表1)。
2. 各品種における収穫果数、総収量、一果重平均を比較したところ、全ての項目において有意差はみられず、小笠原における栽培形質に品種間の差はないと考えられた(表2)。
3. 各品種における果高、果径、赤道部、花痕部、糖度を比較したところ、全ての項目において有意差はみられず、小笠原における果実品質に品種間の差はないと考えられた(表3)。
4. 各品種における栽培管理の手間に違いはみられなかったが、一果重平均が低い「恋するマロン」および「ほっこり133」の生育が悪い傾向がみられた。

【残された課題・成果の活用・留意点】

1. 全ての品種において重量が低い傾向がみられたので、収穫時期などを検討する。
2. 全ての品種において糖度が低い傾向がみられたのは、貯蔵期間が短いためと考えられた。

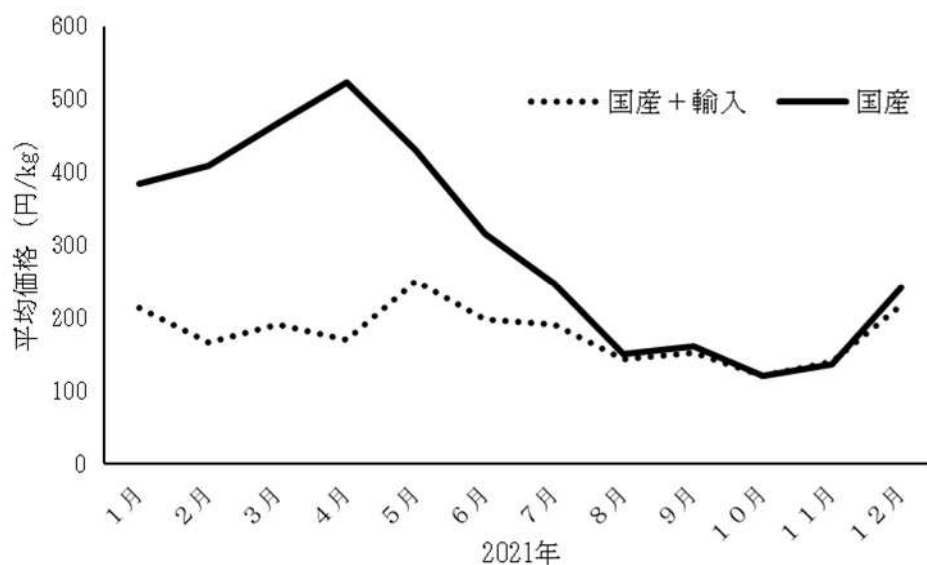


図1 大田市場における価格推移



図2 栽培中のカボチャ

表1 各品種における果形および果皮色

品種名	果形	果皮色
くりほまれ	扁平型, 長球型	黒緑色
恋するマロン	扁平型	黒緑色
ほっこり133	扁平型	黒緑色

表2 各品種における10aあたりの収量調査^z

品種名	果数 (個)	総果実重±標準偏差 (kg)	一果重平均 (kg)
くりほまれ	500 a	1,021 ±282 a	2.0 a
恋するマロン	458 a	596 ±420 a	1.3 a
ほっこり133	500 a	668 ±82 a	1.3 a

^{z)}表中で異なる英文字を付した数値間には, Tukey法により5%水準で有意差があることを示す。

表3 各品種における果実特性調査^z

品種名	果高 (cm)	果径 (cm)	肉厚		糖度 (Brix%)
			赤道部 (cm)	花痕部 (cm)	
くりほまれ	11.9 a	17.7 a	2.8 a	2.3 a	5.0 a
恋するマロン	9.8 a	15.3 a	2.4 a	1.9 a	4.0 a
ほっこり133	10.7 a	14.8 a	2.3 a	2.4 a	4.3 a

^{z)}表中で異なる英文字を付した数値間には, Tukey法により5%水準で有意差があることを示す。